
会いたかったよ、母さん

南波航助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会いたかったよ、母さん

【Zコード】

Z3290D

【作者名】

南波航助

【あらすじ】

東京で、大規模な火災が起こった。私は、独りぼっちになってしまった。親戚のおばさんに育てられ、やがて結婚し、子供が出来た。パツとしない人生を送っていた。妻とは離婚し、ただのブー太郎になってしまったのだ。そんなある日、当時死んだと思っていた母さんが、手紙を送ってきたことを知る。私は、最低な息子だ。

(前書き)

今回初めてこのやうな小説を書かして頂きました。少しこの足を踏み入れて頂けたことに、感謝しております。

「ここからはもう駄目だ、他へ行けえ！」

二十年前の今日、十月八日。東京中を恐怖のどん底へ陥れた大規模な火災が発生した。

私が住んでいた町は東京でも田舎の方だった。しかし、火の手はここまで訪れたのだった。

「母さん、母さん！」

一人の少年が母親に対して泣き叫んでいた。それが、私である。

私は当時、小学三年生であった。

学校で何気なく授業をしていた。すると、いきなり大きな雄叫びが聞こえてきたのだ。

原因は分からない。

三階から見えた町はそれはそれは見るに堪えない光景だった。

人々は燃えさかる住宅をさまよっていた。

幼かつた私ながらも、そのすさまじい光景を忘れる事はないと心に感じていた。

先生も焦つており、何をしたらいのか分から様子だった。火の手は校舎にまでさしかかった。私は多くの友達と共に校庭へと逃げ込んだ。

死ぬことはなかつた。周りでは体中爛れた少年や少女が泣き叫んでいた。

私はふと気づく。母さんは・・・・どこだらうか。

その事件から、私と母が会うこととは無かつた。

友達であるみつちゃんの両親は亡くなつたという。私はまだ燃えかかる家の周辺をさまよい、「母さん」と何度も叫んだ。

私は、独りぼっちになつてしまつたのだ。幼いながらに、現実を受

け止めていた。

「母さん、母さん！」

「何ど叫んでも無駄だつた。

「あれ、浩一郎くんじやない？早くこひちへおいで！」

浩一郎といつのは僕の名前だ。親戚のおばちゃんが声をかけてきたのだった。

つれていかれるままに私は引きずられていった。近くの役所へと逃げたのだ。

そこでも母さんを捜した。しかし、見つかることはなかつた。

事件の事情は役員の人にも分からぬ様子だつた。

「ええん・・・・・・」

私は泣き出してしまつた。おばちゃんは私を優しく抱きしめた。それまで話したこともあまりなかつた人なのに、温かかつた。

その後、私はそのおばちゃんの元へ引き取られることになつた。悲しい現実を受け止め、おばちゃんとその旦那さんと暮らした。初めは遠慮がちだが、本当の親のようにかわいがつてくれた。嬉しかつた。本当に、嬉しかつた。

それから、一十年の月日が経つた。私はもう一十九歳。

あと一年で三十代という少し大人びた称号を得ようとしていた。子供もいる楽しい生活を送つていた。

たまに、本当の母さんのこと思いながら・・・・・・。

「冗談はよしてくれ！」この契約で納得したはずじやなかつたのか？

「すいません、手違いが起きたようで。申し訳ありません」

私は部下を怒つていた。ハツ当たりといつものだつた。今日、女房と喧嘩をしたのだ。

二十年前の事件の話をしているうちに、話題がずれ・・・・・意

見が食い違つてしまつた。

「今日の課長、変ですよ」

「何でもないよ」

「でも・・・・・・奥さんと何がありました?」

以前から親しくしていた部下でありながら友人であった佐藤が声をかけてきた。

「大丈夫だからさあ」

「分かりましたよ」

佐藤は怒つて仕事へ戻つた。誰にでもあたつてしまつのが、私の悪い癖だ。

最近「自殺」「殺人」といつたニュースをよく見るようになつた。あの事件のことを思うと、腹が立つてしまつ。私の性格は、そんな薄汚いものだ。

今日、女房に謝るか。会社ではそう決めていても、家ではまた喧嘩を悪化させてしまう。

喧嘩し、一人になるたびに母さんを思い出してしまつ。

二十年間育ててくれた義理の母ではなく、本来の母親をだ。マザコンとかそういうのではない。本当の家族にただ、会いたいのだ。

そりやあ女房や子供だつてそうだが、そういうのではない。父さん、母さんに会いたいのだ。こんな歳になつても思つてしまつのは、よっぽどだろうか。この話を女房にするだけでも喧嘩になつてしまつ。私たちは、あつていないのかもしれない。そんなこんなで私と妻は、離婚した。ばからしいかもしれないが、女房が悪いのは事実だ。

突然家を出て行つたのだ。理由は簡単、あなたが好きではないつて。せいせいした。

しかし、どことなく寂しかつた。私は仕事にも力が入らず、リストラされた。

今は、フリーターのプー太郎だ。

家も売り、どこも雇つてはくれずアルバイトをただするそんな人生を費やすハメになつた。

自殺することはなかつた。

神様、母さん、父さんにもらつた命を捨てる」と等できなかつたのだ。

私は・・・・どうすればいいのか。そんなことを思つてゐるうちに、四十を過ぎてゐた。髪の毛は伸び、鬍は汚いほど生えていた。そんなある日、一通の手紙が送られてきた。

「ようやく見つけました。明日、故郷へ帰つてきて下さい。詳しい話はそちらで話します。

母より

まさか、私は信じなかつた。

こんなろくでもない人生を送つてゐる者に、母親と会わせられる権利などないと思つたのだ。次の日、私は行かなかつた。手紙は何度かきた。

全てを無視してしまつた。それから、一年の月日があつといつ間に過ぎたのだった。

いつものように、しきたないマンションで、私は暮らしていた。ドンドンドン、ドンドンドン、「おい、開けろー! 浩一郎! 早く開けろー!」

「誰だ、あんた!」

「俺かあ? 俺はお前の母さんの弟の畠広だ!」

思ひがけない名前だつた。畠広おじちゃんが何故ここに。そんなことより、早く開けなくちゃ。私はかぎを開けた。

「てめえ、来い!」

おじちゃんといつよりおじちゃんであつた畠広さんに引つ張られ、車に乗つた。

目には涙が流れている。車を走らせた。

「どうしたんですかあ?」

私はおそるおそる聞いた。

「馬鹿野郎、お前の母さんがなあ・・・・・・俺の姉貴が・・・・・・もつ死にそつなんだよ」

「え?」

意味が分からなかつた。

「お前、一年前から手紙貰つてただろ? 昨日知つたんだが・・・・・姉貴はなあ、お前に会いたくて会いたくて・・・・・ようやく見つけたんだよ」

「そんなん・・・・・」

「うそじやねええ、病気にかかつちまつて・・・・・手紙のこど、昨日姉貴が教えてくれたんだあ、お前、何で来なかつた!」

「嘘かと思つて・・・・・」

「ふざけんじやねえぞ! 馬鹿野郎! 姉貴はなあ、今日でもつ持たないらしいんだ。間に合つかどうか・・・・・」

「何で? 三十年も経つてから・・・・・」

「しらねえのかあ? あの事件の時、ほとんどの人は舟で町を離れたんだ。後になつてお前を捜しても見つからなかつた。諦めかけてたとき、親戚のばあさんがお前を預かつたつて聞いてなあ。電話しても、手紙出しても、ちつとも返事が来ねえ・・・・・てめえふざけやがつて」

おじさんは僕を殴つた。涙をかみしめながら、車を走らせながら。

「そんなん・・・・・まさか・・・・・」

私は自分がしてきたことを後悔した。自分は親不孝ものだ・・・・・。

一時間の間だ、沈黙が続いた。私とおじさんは泣きながら、言葉を交わすことは無かつた。

「着いたぞ!」

走つて病室へと向かつた。

母は、死んでいた。悲しい悲しい顔をしながら。

「ううう・・・・・くそつ!――!」

おじさんは病室を駆けだし、泣き叫んだ。何が起きているのか、今

分かった。

母は、死んでいるのだ。病室の横には私への手紙が書かれてあった。
「あなたの母です。今まで『めんね。あなたに会いたいの。電話しても駄目でした。もしかすると、このまま会えないのかな。故郷で待ってるから、早くいらっしゃい。おいしい『飯、作ってあげるから』」

涙が止まらなかつた。私は、何をやつてこるのだろうか。

「母さん、母さん、ここにこるよーここにこるよーずっと、会いたかったよ」

私は母の冷たくなつた手を握つた。涙が止まらない。こんなに涙つて、でるものなんだ。

私は、最低な息子だ。

それからといつもの、私は職場復帰を果たした。二十%にもみたない可能性を信じ、再就職したのだ。今も必死に働いている。母のことを、思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290d/>

会いたかったよ、母さん

2010年10月21日20時19分発行